

濱邊の五分間

濱 子

同じ五分時間でも都大路の五分間、海上の五分、山中の五分、晝間の五分、夜間の五分、田舎の五分、瀛車中の五分、家の中の五分、皆見る物聞く物感ずる事がちがひませう。私はひとつ濱邊の五分の涼しさを記させよう。

時は明治三十五年の八月十一日の午前五時五分より同十分に至る五分間、處は安房國勝山の濱邊人は四五日前に都から來た私でございます。

私は今、濱邊の眞際にある小山の上で、とある松の木に倚りて海原に面して立つて居る。多くの漁夫は濱邊に、多くの漁船は岸近く沖遠くもはや今日のなりはひをはじめて居る。遙に白帆が三四見える。一直線にきつぱりとひかれた水平線の上を眼を定めて見れば三浦半島と城ヶ島が僅にそれと見える。後の山からはうれしくも朝日が木の間

からかゝやき出して、私の脊を照らし、又岸近き四五の小舟の片側をわかるく照らして居る。廣々とした海原は、人の心は廣かれ、と言つて居るやうである。大浪小浪は靜に濱の汀に寄せてはかへり、山の下の岩に激しては高く低く白い清い水烟となつて上て居る。私はとうとう山を下りて水に突き出た岩の上に立つた。浪の烟はともすれば私の裾に雨をふらす。漁船の數は何時の間にか増して居る。左に見ゆる浮島はいつもかはらず突兀と海中に立つて居る。晴天には正面に見ゆると聞いた富士山、今日は雲立ちこめて姿をかくして居る城ヶ島のあの邊にあの神々しい山は見ゆるのであらうか。磯の松風はそよ／＼と私をなで、居る。朝日は全く後の山をはなれた。私の影は前に長く岩の上に臥して居る。

此靜かな自然に包まれた私、耳に入るものとはうちよする浪の音ばかり、さもなくてさへ涼し

い清い心持のよい濱邊の、しかも夏の朝の五分間はどんなに私の心を洗ひましたでせうか。

暑中休暇

楓

學生が學屋の疲れをば夏の休みにぞ補はるゝ、まして公の試に有らん限りの腦力と身軀とを費し漸く許されて行李早々勇みて歸る古郷の我家、いとも樂しき事ぞかし。

住馴れし家はありし其まゝ笑みて迎へ給へる父母同胞喜びて右左よりありし事共物語る、父は愛で給ふ幅物を出し此は誰か筆、此は何など、其貴を語り給ひ、母は待ち受にとて紙布の織物など見せ給ふ、弟は怪げなる片假名にて「クシベニ」など書ける清書を出してはこる、見るもの聞くもの一として樂しからぬはなし、三伏の暑さも樂しき家のまとのに忘れ、朝な夕なのそゝるありきには弟妹

を打つれ浪打ぎわの貝拾ひ露しげさ夏草をあさり己がまゝなる自然の樂しみ限りなし、雪に螢に一歳の辛酸もわはれこの樂しみに打けたれて夢に過ぎ行く今日幾日、休みの日きりも残りすくなになり、又も母をいそがせて、旅立の用意行李を調べて便船のあるがまゝに立ち出つめり。

うからやからは波止場に立ちて安らげく又の遇ふ日を期して別れを惜しむ様もいとうれし。

こたびは歸省の前と異りて、肉づき顔色もつやくと身のうち凡て新らしくなりてもとの學屋へとかへり、己がじゝ務むるなりけり實に夏の休みこそ我等學生にとりてはいともく大事の賜物ぞかし。

